

「ショーシャンクの空に」の脱獄映画としての獨創性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 悟 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4346

「ショーシャンクの空に」の脱獄映画としての獨創性

学芸学部 国際英語学科 高橋 悟

要旨：1994年に公開された映画「ショーシャンクの空に」は、四半世紀を経た今日でも、世界中で高い人気を維持している。本稿の目的は、同作品がなぜこれほどまでに高い評価を国内外で得ているかを明らかにすることである。そのために代表的な脱獄映画6本の特徴を分析し、それらと本作品を比較しながら考察を進めた。その結果、本作品にみられる獨創性として、主人公の①冤罪、②高い社会的地位、③豊かな教養と深い専門性、④広範で持続性のある利他的行為、⑤ひ弱な肉体、⑥脱獄作業の非開示、⑦極端に長い収監期間、⑧明確な脱獄後のイメージの保有、⑨脱獄後の囚人仲間との再会、⑩復讐、及び⑪出所後の社会適応への不安、⑫親友の囚人によるナレーション、が抽出された。これら12点がいわばスパイスや隠し味となって、本作品を重厚で壮大な人間ドラマへと仕立て、観る者に深い感動と感銘を与えるとともに、その評価を高める上で不可欠の要素になっていると考えられる。

キーワード：脱獄映画、冤罪、教養、利他、復讐

1. はじめに

1994年に公開されたアメリカ映画「ショーシャンクの空に（原題：The Shawshank Redemption）」は、当初劇場ではヒットしなかったものの、徐々に口コミで人気が広がり、現在では観るべき映画の一つとして定着している（Berry, 2015）。我が国の産労総合研究所（2009）が20代、30代のサラリーマン100人に対して行った「はたらく姿、生きる姿を描いて印象に残った映画」に関する調査では、同映画は第1位に輝いている。とりわけ絶望的な状況にあっても諦めない主人公の姿が回答者の共感と呼んだようである。さらにAmazon.com, Inc.の完全子会社として500万本の映画を保有・提供し、全世界で毎月2億5000万人が視聴しているとされるインターネット・ムービー・データベース（IMDb）の映画ランキング（Top Rated Movies）においても、2018年9月現在、同映画は第1位の座を維持している。ちなみに第2位は「ゴッドファーザー」、第3位は「ゴッドファーザー2」、第4位は「ダークナイト」、第5位は「十二人の怒れる男」と続いている。

本稿の目的は、「ショーシャンクの空に」がなぜこれほどまでに国内外で高い評価と支持を今日まで得ているかを明らかにすることである。そのために既存の他の脱獄映画と比較しながら分析・考察を行い、その獨創的特徴を抽出することとする。

2. 「ショーシャンクの空に」のストーリー

本作品は冤罪で投獄された一人の男を主人公としている。舞台は米国東部メイン州であり、時代設定は1940年代後半から60年代後半にかけてである。主人公のアンディは、30代の若さで大手銀行の副頭取を務めていたが、酒に酔って妻と間男を銃殺したという無実の罪で終身刑2回分を宣告された。1947年にショーシャンク刑務所に収監された彼は所長や看守、囚人たちからの理不尽な仕打ちや暴力に苦しめられながらも耐え抜く。その過程において自らの力で周囲の信頼を勝ち得、友情を育み、そして1966年に見事脱獄を成功させる。最後は仮釈放で出所した無二の親友であるレッドとメキシコの太平洋岸の白い砂浜で感動の再会を果たすシーンで幕を閉じる。

本映画の原作は、スティーヴン・キングが1982年に発表した「刑務所のリタ・ハイワース（原題：Rita Heyworth and Shawshank Redemption）」という中編小説である。

3. 比較対象作品の選定

「ショーシャンクの空に」の獨創性を明らかにするためには、本作品だけを取り上げて自己完結的に論じるだけでは不十分である。したがって他の脱獄映画と比較する必要があるが、その選定に際しては以下の文献を信頼できるソースとして参照した（詳細情報は

「参考文献」に記載）。

- American Prison Film Since 1930 (2006)
- 1001 Movies You Must See Before You Die (2015)
- Prison Movies (2017)

以上の文献において、一つ目に関しては単に映画タイトルに言及するだけに留まらず、10 ページ以上の紙幅を割いて論考している映画を選び出した。二つ目については半ページ以上の論評を掲載している作品を選定した。三つ目に関しては2 ページ以上にわたって論述しているものを選定した。いくつか重複も見られるが「ショーシャンクの空に」と対比するにふさわしい映画として6つの作品を抽出することとした(表1参照)。

なお、本稿における作品選定に際しては、個人の責に帰さない戦争捕虜収容所からの「脱走」を描いた映画、及び最新のハイテク装備の刑務所から体を張り目まぐるしいアクションを展開して脱獄を試みる映画は除外した。

表1 「ショーシャンクの空に」及び比較対象作品の一覧

	タイトル (公開年)	American Prison Film Since 1930	1001 Movies You Must See Before You Die	Prison Movies
1	手錠のままの脱獄 (1958)	×	○	○
2	穴 (1960)	×	○	×
3	暴力脱獄 (1967)	○	○	×
4	パピヨン (1973)	×	○	×
5	ミッドナイト・エクスプレス (1978)	○	×	○
6	アルカトラズからの脱出 (1979)	○	×	○
7	ショーシャンクの空に (1994)	○	○	○

注：○は掲載、×は非掲載を表す。

4. 比較対象作品の概要と特徴

(1) 「手錠のままの脱獄」

本作品(原題: The Defiant Ones)は1958年に公開されたアメリカ映画である。舞台は主人公(2人)のセリフから米国中西部と推測される。また時代設定は制作時と同じ1950年代と考えられる。

本作品は、豪雨の中を走行していた囚人護送車が崖から転落し、その事故に紛れて脱走した2人の囚人の逃避行を描いたものである。一人は自動車整備士をしていた白人のジャクソンで、もう一人は農場で働いていた黒人のカレンである。前者は武装強盗と公務執行妨害で15年、後者は加重暴行と殺人未遂で20年の刑で服役中であった。この映画の最大の特徴は人種の異

なる2人が1つの手錠で繋がれたまま逃走することである。本作品の制作・公開時、米国では公民権運動が吹き荒れており、人種差別を禁止する公民権法が制定されたのが1964年であることを考え合わせると、当時としては極めて社会性と話題性に富んだ映画であったと思われる。

さて、逃走直後に現場を訪れた保安官のリーダーは同僚に対し、2人の囚人はすぐに殺し合うはずであり追跡には及ばないとの上司の言葉を伝える。まさに2人は人種間の激しい憎悪に基づき、口論し、時に殴り合う。しかし手を取り合って難所を越え、野宿し、身の上を語り合う中で次第に信頼と友情を育んでいく。

ある日彼らは僻地の村の母子家庭で夕食の提供を受け、ハンマーを借りて手錠を壊すことに成功する。しかしジャクソンは左手首の擦傷から細菌が入り高熱で倒れる。夫に捨てられたこの母親は彼に付き添って看病する。心に虚しさを抱える彼女に対して彼は、それを埋めるのは涙ではなく「夢」だと諭す。そして頭の中に絵を描くことの大切さを伝え、「いろんな事、場所、人、あこがれてる物すべて。例えば音楽と紙吹雪の中で踊る自分を思い描く。あるいは船に乗ってる自分。大型船で遠くへ行く。そして未知の土地に降りる。白い砂、灼熱の太陽。(中略)誰かが待ってる。純情で、温かくて、優しい人」と彼が刑務所の中で実践していることを教える。

一夜にしてジャクソンに恋をした彼女は翌朝、息子を兄に預けるので自分も一緒に連れて行ってほしいと彼に懇願する。彼は了承し、自分と彼女は南部へ、カレンは北部へと向かうことになった。しかし彼女がカレンに教えた道は実は底なし沼だらけのルートであった。カレンが立ち去った後、口封じのためにわざと生きて出られない方角を教えた彼女が話した時、ジャクソンはその身勝手さに激怒する。そして共に逃げたいと哀願する彼女を乱暴に振りほどくのだが、この場面を目撃した彼女の息子がジャクソンに向かってライフルを発砲してしまう。ジャクソンは左肩に銃弾を受けながらもカレンの身を案じて走り出し、ようやくカレンを捜し出す。そして母親の嘘で自分たちは現在危険地帯にいること、傷を負った自分はいくら歩けないことを伝える。しかしカレンは右手をあげ、自分たちが見えない鎖で繋がっていることを無言で示し、ジャクソンと一緒にいこうと促す。無論「見えない鎖」とは彼らの「心の絆」を示している。物体としての鎖は憎悪を象徴し、消えた鎖は友情を表しているとも受け取れる。

どうにか線路に出た彼らは疾走する貨物列車に飛び乗ろうとする。まずカレンが成功し、懸命に追走するジャクソンに必死になって手を差し伸べる。彼らはいったん手を握り合えたように見えたが、その直後にジャクソンは転倒し、カレンも列車から落ちてしまう。この時カレンは自分だけ逃走しようと思えば、手を差し出すこともなくそのまま列車に乗り続けることもできた。しかしそうはしなかった。彼らはすでに堅い友情で結ばれており、信頼と友情の真価が問われるその瞬間にカレンは咄嗟に利他的な行動を取ったのである。また映像では細かい動きまで描写していないが、ジャクソンが転倒し、共に行動できないと知った瞬間、カレンは自らの意思で列車から手を放し、ジャクソンと一緒に斜面を転げ落ちたとも考えられる。様々な解釈が可能であるが、この場面は本作品のクライマックスといえるであろう。

2人はカレンが負傷したジャクソンを抱きかかえる形で草むらに座り込み、近づく警察犬の鳴き声を聞いて観念する。「かき回してやったな」と言うジャクソンに対して、「頑張ったさ」とカレンが戦友のように応じる。この時2人の顔には笑みが浮かんでおり、それは逃走は失敗したものの根拠のない人種の偏見を克服し、互いを一人の人間として理解し合えたことに対する満足感を示しているかのようである。カレンが黒人霊歌を歌っているところに保安官が来て立ち止まるところで終幕する。しかし彼もまた生きたままの2人を見つけて安堵し、温情的な笑みを浮かべている。

この保安官は追跡中に獯猛なドーベルマン犬を放って彼らを噛み殺させようとする同僚の考えに強く反対し制止している。同保安官は体制・権力側に立つ人間でありながら、囚人に対しては寛容な心の持ち主として描かれている。

(2) 「穴」

本作品（原題：Le Trou）は1960年に公開されたフランス映画である。舞台はフランス国内であり、1947年にサンテ刑務所で実際に起きた脱獄事件に基づいて制作されている。その旨を当事者の一人が映画の冒頭で語っており、さらに驚くべきことに、彼自身が囚人たちのリーダー格のロラン役で出演している。時代設定は明示されていないが、1940-50年代と推測される。

脱獄の首謀者は、一つの房にまとめて入れられている4人の囚人（ロラン、マニュ、ボスラン、ジョー）である。彼らは何らかの重罪を犯した未決囚であり、

裁判になれば最低でも10年の刑を受けることになると考えている。この4人が脱獄を目論んでいるところに、改修工事のため別棟にいた囚人が彼らの房に移ってくる。このガスパールという名の囚人は5人の中では最も若く、身のこなしも話し方もどこか繊細で弱々しい。これに対して先の4人は粗野で屈強そうである。ただし粗暴ではなく互いに仲が良く、新入りのガスパールを好意的に受け入れる。

こうして5人になった仲間の中で、唯一ガスパールの職業と罪状が詳しく明かされている。また面会に刑務所を訪れる人（義妹）がいるのも彼だけである。彼は車のセールスマンであり、妻との口論に発したもみ合いで猟銃が暴発し、肩に銃弾を受けた妻が計画殺人未遂として彼を告訴している。こうした事情をガスパールが素直に話したことによって4人は彼を信用し、脱獄計画を打ち明け、その仲間に加える。

その後は、脱獄3回の経験を持つロランが中心となり、巧みに調達した素材で道具（潜望鏡、砂時計、合鍵等）を作り、房の床板を外し、その下のコンクリートを叩き割って穴を掘り続ける。彼らは房内で厚紙の箱を作る仕事をしながらその厚紙で穴の入り口の床を隠す。そして昼夜にわたり交替で穴掘り作業をした結果、刑務所の地下通路に出、さらに地下水道に出ることに成功する。その終点は固いコンクリートの壁で塞がれていたが、それを迂回する形でさらに穴を掘り進め、ついに彼らは外界のマンホールへと行き着く。蓋を開けて早朝の町を眺めたのはマニュとガスパールであった。ここで2人は仲間を裏切って脱獄することもできたが、その夜皆と共に決行するため自分たちの房へと引き返す。

ロランが初めてコンクリートを叩き割ってからマンホールに到達するまでの期間は1週間前後か長くても2週間程度と考えられる。この期間中にジョーは脱獄しないとロランに告げる。ジョーには重病の母親がおり、脱獄すれば警察が実家に来るので彼女を悲しませたくないという理由で房に留まる選択をしたのである。彼はロランに脱獄の秘密は守ると言い、その後仲間にも伝えて了承を得る。

決行日の昼間、ガスパールは所長室に呼ばれ、妻が告訴を取り下げたこと、判事が免訴に署名すればまもなく釈放されることを知らされる。両者の映像はここで消えるがこの面談はその後2時間も続いた。その夜、ジョー以外の4人は脱獄後に逃走を続けるための服装に着替える。しかし穴に潜り込む直前に、看守たちが突入してきて取り押さえられ、脱獄は失敗する。

マニユに睨まれたガスパールは「違う！」と叫ぶが、一連の場面から彼が所長に誘導尋問され秘密を洩らしたことは明白である。所長と取引し、仲間を裏切ったガスパールに対し、捕まったほうのロランが「哀れだな」と言い放つ。怯え切った表情のガスパールが独房に移され施錠される場面で終わる。

刑務所という隔絶した一つの小世界にあって、罪人でありながらも、人間としての矜持や品性とは何かということを考えさせられる作品である。

なお、この映画では一切バックミュージックは使われていない。それがコンクリートを叩く音や、格子をのこぎりで切る音、差し入れ品を仲間に分け合って食べる音、地下を流れる水音などをよりいっそう引き立てている。またこの刑務所には囚人服も共同食堂もない。それぞれの房の中で乏しい食事を取るだけである。厳しい労役もなく、体制・権力側としては所長だけが穏やかな笑みを浮かべる人間味のある役を演じている。看守たちは総じて無表情だが、囚人に対して暴力を振るうことはない。Penning (2005) はこの看守たちのことを決まりきった業務を淡々とこなすだけのロボットのような存在と評している。

(3) 「暴力脱獄」

本作品（原題：Cool Hand Luke）は1967年に公開されたアメリカ映画である。舞台は米国フロリダ州であり、時代設定は第二次世界大戦終了後の数年間と考えられる。

主人公の名はルーカス（愛称ルーク）である。彼は酒に酔ってパーキング・メーターの頭を工具で切り落とした罪で2年の刑に処される。ルークは戦争で多くの功績を残しており、刑務所到着日にそれに気づいた所長は、なぜそんな変なことをしたのかと尋ねると、彼は「暇つぶしです」と爽やかな笑顔で答える。

Gonthier (2006) は、ルークのことを典型的なアンチ・ヒーローであり、自分の世界を持つ究極のアウトサイダーであると評している。ルークは看守にも他の囚人に対しても反抗的な態度を取り、虫が好かない存在として当初日々を過ごす。しかしある日、巨漢の牢名主のドラッグラインとボクシングをするのだが、そこで何度打ちのめされてもその度に立ち上がるルークの姿を見て囚人たちは度肝を抜かれる。またルークはポーカーをした時も、全く札が揃っていない「手（hand）」であるにもかかわらずハツタリをかまして勝ってみせる。さらにゆで卵50個を一人で食べられると公言し、本当に食べてしまう。この時囚人たちは

50個目に近づくにつれて心一つにして彼を応援する。加えて、本来は苦役であるはずの炎天下での道路の整備作業もルークにかかる運動会のように楽しいものになってしまう。こうしてルークは囚人たちの人気者となる。だが、看守たちはこうした彼の振る舞いを苦々しく思っていた。

本作品においてルークは3回脱獄を図る。最初は独立記念日のどんちゃん騒ぎに紛れて床板を切り、その下の空間を這って脱獄する。彼は外の世界に出るが、後を追った一人は敷地内で捕まってしまう。その後ルークも捕まり、囚人たちの前に見せしめとして突き出される。2回目は道路作業中に便意を申し出て草むらに隠れ、糸で細工をして姿をくらました。囚人たちはルークの見事な逃げっぷりに喜ぶ。その後しばらくしてドラッグラインは自分に送られてきた雑誌の中にルークが美しい女性2人の肩を抱いて写っているページを見つけ、彼は仲間とともに狂喜する。しかしやがてルークは捕まり、刑務所に連れ戻される。その後看守たちはルークに公然と暴力を振るい、意味のない作業を延々とやらせるようになる。その苦痛に耐え切れず、ついにルークは音を上げ、彼らに服従を誓う。

すっかり牙を抜かれたルークは看守たちに対してへつらう態度さえ取り始め、仲間にも侮蔑されるようになる。しかしある日、道路作業の一瞬の間隙を突いて刑務所保有のトラックに乗り込みアクセルを踏む。直後にドラッグラインも助手席に飛び乗る。これが3回目の脱獄である。この時ルークは事前に他のトラック数台の鍵を抜いており、看守たちは追いかけることができなかった。自分たちをも欺いたルークのこの逃走劇に、その一部始終を見ていた囚人たちは胸のすく思いであった。しかしその後まずドラッグラインが捕まり、次にルークも教会の中にいることを突き止められ、呼びかけられて顔を出したところを射殺されてしまう。最後は、刑務所に連れ戻されたドラッグラインが屋外で仲間と共にルークの屈託のない笑顔を懐かしむ場面で終わる。

以上が大まかな流れであるが、この作品には全体を通底する大きなテーマがある。町山 (2017) はそれを「実存主義」と呼んでいるが、筆者がそれを平易な言葉で表現すれば、神の存在を否定する考え方である。すなわち、神が人間を創ったのではなく人間の想像力が神を作ったにすぎないとする考え方である。例えば屋外作業中に雷雨に遭う場面では、ルークだけ避難せず、天に向かって「こんな命いつでもくれてやる。神よ、聞いたか。さあ持っていけ。そこにいるのか。愛

するか殺すかしるしを見せろ」と叫ぶ。しかし結局神は現れず、彼は「雨の中の独り言さ」と冷ややかにつぶやく。また銃で撃たれる直前に忍び込んだ教会の中でも、彼は天井を見上げ、自分が戦争で人を殺したことを告白し、今後自分がどうすればよいかを神に尋ねる。彼はひざまずいて目を閉じるが物音一つしない。やむなく彼は「道は自分で探すか」と吐き捨てるように言って立ち上がる。

その一方で、奇妙なことにこの映画はルークをキリストに見立ててもいる。彼は突拍子もないことをしたり、バンジョーを弾きながら歌を歌ったりして、自分のみならず他の囚人たちを癒し楽しませようとする。こうした利他的行動を取る彼の姿を見て、ピーター・バラカン(2001)は「抑圧的な権力の下で生き甲斐を失っている囚人たちに希望を与えるルークは、一種の救世主のように見える時がある」と述べている。

このように本映画が徹底してルークを神に対して反抗させながらも彼をまるで神のように描いている理由として、原作者と監督の意見が割れたことを渡部(2014)は明かしている。前者はルークを「等身大の男」として、後者は「キリストのような男」として描きたかったのだが、それが叶わなかった。したがって本作品は原作者と監督の折衷案ともいえるが、前者の主張がわずかに優り、キリストのイメージは小道具として所々に用いられるに留まったと考えられる。

本作品では、ルークは一貫して社会や人間に絶望し虚無感に支配されたニヒリストとして描かれている(町山, 2017)。また彼は脱獄後に実現したいことを一切思い描いていない。脱獄という行為が自己目的化しているのである。また固い友情のように見えるドラッグラインとの関係も、実はドラッグラインの一方的な片想いである。それは3回目の脱獄後の野営中、これから一緒に大きな仕事をしようと誘うドラッグラインに対し、ルークがきっぱりと断り、別れを告げて歩き出す場面からも見て取れる。

ちなみにこの映画では、ルークと同じ日に入獄した彼を含む4人の囚人以外はその罪状は一切不明である。囚人たちは知性こそ感じられないものの、喜怒哀楽のあるごく普通の人々のように見える。彼らは窮屈なルールや規律に縛られ、権威・権力に支配され操られた現実社会をひたすら従順に生きる我々のようでもある。本映画が50年以上経った今でも、とりわけ米国において根強い人気を誇る理由の一つは、人間が恐れるべき神や死をも恐れぬルークの生き方に観る者の魂が揺さぶられることにあると考えられる。

(4) 「パピヨン」

本作品(原題: Papillon)は1973年に公開されたアメリカ映画である。舞台はフランス領ギアナであり、時代設定は映像からは読み取れないが、原作(実際の脱獄者による自伝)に基づけば1930年代前半から1940年代前半にかけての話になる。

題名の「パピヨン」はフランス語で蝶を意味し、胸に蝶の刺青をしている主人公の呼称から来ている。彼は犯してもいない殺人の罪で終身刑を言い渡され、ギアナの刑務所に投獄される(ただし彼はセリフの中で金庫破りをしたことは認めている)。ちなみに囚人たちは全員フランス国籍であるが、映画興行上の理由により、使用言語はすべて英語になっている。

パピヨンは計3回の脱獄を試みる。まず、気分が悪くなり倒れたドガという贋金作りに長けた囚人に対して暴力を振るう看守を制止し、取っ組み合う中で一人逃走を図る。しかしジャングルの中で捕まり、別の島の独房に移送される。独房入りの期間は2年だが、その環境は劣悪である。パピヨンの健康を案じたドガは看守を賄賂で買収し、密かにヤシの実を差し入れる。しかしそれが独房長にばれ、パピヨンは食事を半減させられたうえ、独房に入る光も板で遮られる。それでも強靱な肉体と意思を持つパピヨンはゴキブリやムカデを捕まえては食べ、生き延びる。

独房を出たものの体を壊した彼は療養房に入れられる。ここで敷地内での演奏会の賑わいに乗じて2回目の脱獄を図る。この時のメンバーはパピヨン、ドガ、そしてマチュレットという名の囚人の3人である。彼らは顔に刺青をした謎の男や病気を患う島民に助けられながら逃亡するが、パピヨン以外の2人は途中で捕まってしまう。その後もパピヨンは裸族などに助けってもらい逃亡を続けるが、修道院長の密告でとうとう捕まり、再び独房に収監されてしまう。そこで5年の刑を終えた彼は殆ど廃人と化し、出獄の日マチュレットの衰弱死と海葬を見届ける。

パピヨンは絶海の孤島に移送され、偶然にもそこでドガと再会する。この島に鉄格子はないが、鮫と潮流が人間が泳ぎ切ることを阻んでいる。しかしパピヨンは潮の流れを分析し、7回に1回来る大きな波に乗れば沖まで出られることを発見する。彼はドガを誘うが、ドガは島に留まることを選択する。彼らは最後に抱き合って別れを告げ、そしてパピヨンは断崖絶壁から海に飛び込み、ヤシの実を詰めた袋を筏にし、脱獄を成功させる。最後にカメラが大海の波に揺れる彼をズームアウトしながら、「パピヨンは自由を手に入れ

た。そしてその余生を自由人として送った」というナレーションが入る。

以上が大きな流れである。先の「手錠のままの脱獄」では人種を越えた友情が描かれていたが、本作品においても、同じ白人ながら囚人同士の固い友情が描かれている。ヤシの実を差し入れた者を白状するようパピヨンに迫り痛みつける独房長らに対し、パピヨンは最後まで口を割ることはなかった。

なおこの作品の中では、主人公以外の囚人の同性愛がわずかながら描かれている。また刑務所内で囚人から看守への賄賂が横行していること、そして何よりも脱獄が成功するという点が先述の3作品と異なっている。

(5) 「ミッドナイト・エクスプレス」

この作品（原題：Midnight Express）は1978年に公開されたアメリカ映画である。実話に基づく本作品の舞台はトルコのイスタンブールであり、時代設定は1970年から75年までである。

本作品の主人公はビリーという米国人の青年であり、恋人のスーザンと一緒にトルコ旅行を終え、飛行機に乗り込む寸前で、麻薬を体に巻き付けているところを見つかり拘留される。現地で安く仕入れた麻薬を帰国後に友人に売ろうと軽い小遣い稼ぎの気持ちからしたことであった。しかしそれが当時麻薬の国外への不法持ち出しに神経をとがらせていたトルコ政府から重罪とみなされた。裁判においてトルコ側の検事は終身刑を求めるが、最終的に4年2カ月の刑が言い渡される。これには当時、米国とトルコの外交関係が険悪であったことも災いした。映画の題名は収監された刑務所内で脱獄を意味する隠語である。

異国における狂気と暴虐に満ちた獄中生活をビリーは耐え抜くが、出所まであと53日と迫った時、彼の刑は再審に付され、無情にも30年に延びることが最高裁で確定する。

その後、ビリーは2回の脱獄を試みる。最初は、入所後に親しくなった米国人のジミーと英国人のマックスと共に刑務所の壁をくり抜いて逃げ出そうとするものである。しかし他の囚人の密告によって失敗に終わる。なお、この時に未遂犯として捕まるのはジミーだけであり、彼は刑務所長に痛みつけられても最後まで口を割らず、ビリーとマックスは守られた。彼らは後になってジミーが重度のヘルニアに罹り、町の病院に送られたことを知る。

時は流れ、ある日恋人のスーザンが刑務所を突然訪

れ、ビリーと涙ながらに面会し、去り際にアルバムを渡す。その最終ページには100ドル札10枚が隠されていた。ビリーは看守に頼んで所長と面会し、1枚の紙幣を差し出して脱獄の容易な病院への移送を願い出る。所長は紙幣を受け取ったが、ビリーを密室に連れ込んで乱暴しようとする。ここでもみ合いとなり、ビリーは所長を突き飛ばして死なせてしまう。その後、所長の服に着替えた彼は監視体制の甘さを突いて刑務所を抜け出す。そして国境を越えてギリシャに入り、3週間後にニューヨークの空港に無事到着する。

本作品には以下の5つの特徴があると考えられる。第一に、この物語は誰にでも起こりうるということである（田山, 1978）。主人公は軽薄で身勝手などどこでもいそうな一介の若者である。彼がほんの出来心でしたことが外国では重罪となり、人生を棒に振る結果となりかねないことをこの映画は教えている。第二に、本作品は、人間が犯した「罪」、その人間に対して課される「罰」とは何かという根源的な問いを観る者に投げかける。最高裁法廷で30年の刑を言い渡された時、ビリーは時代や場所によって変転する法の曖昧さと恣意性を糾弾する。第三に、この映画が主人公にとって外国を舞台にしていることである。異国の人間たちの会話は意図的に字幕に表示されず、何が進行しているのかを理解できない視聴者は主人公と共に不安と恐怖を増幅させる（皆川, 1978）。第四に、本作品は本稿で取り上げる7つの映画のうち唯一、冒頭で主人公が犯行に及ぶまでの過程を詳細に描写しており、それが視聴者の脳裏に刻まれる。さらに主人公は自分が犯した罪を反省するどころか、それを棚に上げて刑が重すぎると不満ばかりを募らせるが、これらは視聴者が主人公に対して同情し感情移入することを妨げていると思われる。最後に、本作品は本稿で取り上げる他作品と異なり、唯一主人公と他の囚人が互いの裸体を優しく撫で合う場面を映し出す。極めて短時間であるが、絶望的な環境下において人間が向かう一つの性的傾向を描いていると考えられる。

(6) 「アルカトラズからの脱出」

この作品（原題：Escape from Alcatraz）は1970年に公開されたアメリカ映画である。実話に基づいて制作された本映画の舞台は米国のサンフランシスコ沖合にあるアルカトラズ島内の刑務所であり、時代設定は1960年からの約2年間である。

アルカトラズ刑務所は全室独房で厳重に監視されており、仮に島外に出られたとしても潮流は速くて冷た

く、途中で溺死すると考えられている。過去に脱獄に成功した者は皆無である。ここにフランクという囚人が他の刑務所から移送されてくる。彼の犯した罪や刑期は不明であるが、何度かの脱獄歴があり、家族は無く、知能指数は極めて高い。これらの情報は収監直後に刑務所長室に呼ばれたフランクと所長とのやりとりで明らかにされる。この時フランクは所長の机の上にあった2つの爪切りのうちの1つをくすねる。

彼は性的関係を求めて近寄ってきたウルフという巨体の囚人を殴り倒すが、一方でネズミを飼っているリトマス、絵を描くことが好きなドク、図書室係のイングリッシュ、後から隣室に入居してきたバツとといった囚人たちと親しくなる。後になって彼はこうした仲間に助けってもらうことになる。

ある日フランクは以前の刑務所仲間であるアン格林兄弟と食堂で出くわす。彼らも度々脱獄しては失敗し刑務所を転々としていたが、最後にアルカトラズに送られてきていた。数日後、フランクは聖書に中に隠していた爪切りを使い、独房の通気口の周りの壁を削ると、それが意外にもろいことに気づく。彼はそこをくぐって屋上に上がれば外へ出られると考えた。翌日、食堂でアン格林兄弟とバツにその話をすると、彼らも脱獄に加わりたと言い出す。こうして4人は密かに材料を入手し、穴掘り道具やカモフラージュ用の首人形、救命袋などを分担して作る。

ある深夜、ついに彼らは脱獄を決行する。バツは怖気づいたのか独房を出るのが遅れ、刑務所内に留まることになる。しかしフランクとアン格林兄弟の3人は海へ出ることに成功する。その後の彼らの消息は不明であり、隣の島に上陸したか、大陸側にたどり着いたかは明らかにされない。しかし脱獄を許し屈辱にゆがむ所長の顔がスクリーンに映し出される。最後に、徹底した捜索にもかかわらず死体は発見されず、この事件後1年を経ずして同刑務所が閉鎖されたことをキャプションが告げる。

以上が大まかなプロットであるが、この映画には次の3つの特徴があると考えられる。一つ目は、前掲の作品と異なり、主人公に人間臭さが全くないことである。宇田川(1979)はフランクを「無色透明なヒーローのイメージ」と形容し、Kehrwald(2017)は彼を鋼鉄の意思と冷徹な理性の持ち主と評している。それがこの作品の魅力の一つでもあり、主人公の寡黙な行動力と並外れた肉体美(高沢, 1979)が聴衆の目を終始引きつけているといえる。

二つ目は、この映画では獄中生活にあって心の平静

さを保つための要素として「趣味」にスポットを当てていることである。絵を描くドクとペットとしてネズミを飼うリトマスにとって、その行為は単なる趣味を越えた生き甲斐となっている。狭量な所長の非情な仕打ちによって、ドクは取り返しつかない自傷行為をし、リトマスは心臓発作で倒れてしまう。獄中であっても、今を生きる証としての「趣味」は、これまで本稿で取り上げた作品の中には描かれていない点である。

三つ目は、この映画では脱獄の成否、より正確に言えば脱獄後の生死が明らかにされていないことである。前掲の5作品では脱獄が失敗すること、または成功して生き続けることがはっきりとその中で示されていた。しかしこの映画は事実に忠実に描こうとされているせいか、脱獄者たちの生死は最終的に観る者の期待や願望に委ねられている。

5. 考察

本節では本稿における主作品である「ショーシャンクの空に」と前節で解説した他の6つの作品との比較分析を通じて考察を行う。

「ショーシャンクの空に」に関しては、「希望」を大きなテーマとしているとする見方が多い(渡辺, 1995; 鷺巣, 1995; Sobol, 1996; 姜, 2007; Parse, 2007; 西内, 2009)。また本映画は「友情」も取り上げており(黒川, 2005; 金澤, 2017)、監督のダラボン自身もその原作を「メイン州の架空の刑務所内における囚人同士の何十年にもわたる友情を描いた、優しくてとてつもない物語」と評している(Darabont, 1996)。ちなみに國友(2015)はさらに踏み込み、本作品を同性愛映画として鑑賞する野心的な試みをしている。

齋藤(2003)は、主人公アンディの周到な準備から実行に至るまでの根気、持続、見通す力に着目し、際立ったテーマとして「段取り力」を挙げている。また姜(2007)とReinhartz(2013)は、本作品には「聖書的要素」、すなわちキリスト的人物像が見え隠れすると指摘している。

しかし「希望」「友情」「段取り力」「聖書的要素」は他の作品においても扱われている。そもそも自由の身になることを渴望し、不屈の精神で周到な計画を練り、仲間の支援を得なければ脱獄することはむずかしい。また解釈の仕方次第で世の中のすべてはいくらかでも聖書的になりうる。実際に「ショーシャンクの空に」では、小道具として聖書が使われているが、Reinhartz(2013)は、本作品にはそうした要素がな

くても物語として十分に成立すると述べている。また濱野（1999）は、原題に「救い」や「救済」という語が含まれているにもかかわらず、「このドラマに宗教性を感じることはほとんどない」とさえ言っている。

ここではこれまでの論考を踏まえ、さらに進んで筆者が考える「ショーシャンクの空に」の独創的な特徴を以下に12点挙げる。

(1) 冤罪

他の6作品と異なり、「ショーシャンクの空に」の主人公のアンディだけが「冤罪」で収監される。これにより視聴者は自ずと彼に同情を寄せる。「パピヨン」の主人公も殺人については無実と主張するが、金庫破りはしており、親友の一人が贖金作りの罪で投獄されたことを考えれば、どのみち彼は同じような運命をたどることになったと推測される。これに対してアンディには前科がなく全くの無実であった。

なお、映画ではないが、本作品の中で寄贈図書の一冊として出てくるアレクサンドル・デュマ原作の小説「モンテ・クリスト伯」では、恋敵、同僚、検事代理の3人によって主人公ダンテスが陥れられ、無実の罪で投獄される。他方「ショーシャンクの空に」では、後半に実際に銃の引き金を引いた真犯人が映し出されるが、彼はアンディを陥れようと画策したわけではない。

(2) 高い社会的地位

アンディは弱冠30代にして大銀行の副頭取を務めていた。他作品の主人公は皆、どちらかといえば労働者階級・中流階級より下か、あるいは不明である。超エリートであった彼は、刑務所という理不尽で残忍な世界に閉じ込められ、それまでの人生とは全く異なる劣悪かつ陰惨な環境で生きていくことを余儀なくされる。ある一日を境に生じたその落差は、察するに余りあるものである。

(3) 豊かな教養と深い専門性

アンディが刑務官の信頼を勝ち得、仲間から一目置かれる存在へと変わっていったのは、彼の教養と専門性に負うところが大きい。鉱物や音楽への造詣が深く、適当な石を拾って紙ヤスリで削ってはチェスの駒を作る。また王様の遊びとされるチェスにも強い。さらに州議会に6年間毎週手紙を送って陳情した結果、大量の書籍やレコード、小切手の寄贈を受け、その中から仲間に関かせたい楽曲を適切に選び出す。また書

籍をジャンル別に分類し、刑務所内に立派な図書室を作り上げる。その他、聖書に関してはその細部に至るまで刑務所長と比肩するほど精通している。そして彼は、脱獄決行日の夜が雷雨になることも前もって把握し、その日に照準を合わせていた可能性がある。下水管を岩で砕く時に発生する大きな音をかき消すには、その時間帯に雷鳴が轟く必要があったからである。

なお、「アルカトラズからの脱出」の主人公フランクも高い知能指数の持ち主であるが、その能力を感じさせるのはもっぱら皮肉を言ったり暴力を回避したり悪知恵を働かせたりする場面であり、彼から教養に裏打ちされた品性を感じ取ることは困難である。

アンディは教養に加え、銀行員として身に付けた税務や会計の知識を存分に活かす。例えば看守主任のために相続税免除の手続きをしたり子どもに良い教育を受けさせたいと願う看守の資産形成に助言したりする。さらに別の刑務所の看守たちの納税手続きまでも支援するほどになる。アンディの有能さを聞きつけた刑務所長は看守主任に命令し、アンディに繰り返し性的暴行を働く囚人を文字どおり叩き潰し、囚人用の病院へと片道切符で送り出す。そしてアンディを洗濯係から図書室係へと格上げする。他方、行政手続きや法律全般に通じ、それらの抜け道も知悉しているアンディは、汚職にまみれた所長の資金洗浄までも手伝わされることになる。こうして彼は良くも悪くも刑務所内で不可欠の存在となっていく。

人間が苦境や逆境にあって、それでもなおかつ人生をたくましく生き抜く上で、いかに教養が大切であり、どれほど専門的な知識やスキルが役立つかということはこの映画は教えてくれる。

(4) 広範で持続性のある利他的行為

アンディは自らの教養と専門性を活かして仲間を癒したり刑務官を助けたりする。看守主任の相続手続き無償ですのと引き換えに、彼に囚人たちにビールをご馳走させる。また美しい曲を拡声器から流し、その科で懲罰房に入れられるが、出た後には仲間と協働し、仮釈放中に自殺した元図書室係の名を冠した記念図書室を作る。こうして囚人たちは日常的に芸術に触れられるようになる。またそこでトミーという家族持ちの囚人に教育を施し、高卒資格を取ることを支援する。こうして彼は自らに危害が及ぶことを承知で、数々の利他的行為を嬉々として行うのである。

他の作品の主人公たちにも利他的な所は見られるが、その対象はごく少数の仲間に限られている。「暴

力脱獄」のルークの場合も、その行動は刹那的で一時的な影響力しか持たない。これに対して、アンディの利他的行為は、図書室整備や高卒資格取得といったより広範で持続性のある性質を伴っている。

(5) ひ弱な肉体

アンディには教養と専門性はあるが、肉体的強靭さはない。長身だが色白で腕力もない。これに対して他作品の主人公は一律に頑健である。かろうじてアンディに近い人物として想起されるのは、「穴」で途中から脱獄仲間に加わったガスパールである。彼も体の線が細く神経質そうであるが、脱獄時の年齢は27歳であり、アンディよりもはるかに体力があったと考えられる。さらに厳密に言えば、彼は主人公ではなく、最後に仲間を裏切る準主人公的な存在であった。

(6) 脱獄作業の非開示

アンディは親友のレッドを含め、誰にも脱獄作業を進めていることを明かさない。脱獄に関しては完全に守秘を貫いている。また同様に視聴者にも全くそれは開示されない。彼が脱獄に成功した後で、初めてその作業過程がレッドの語りによって解説される。このまさかの展開に作中人物のみならず、観客までもが驚かされる。この意表を突かれた感覚がアンディの脱獄劇をより一層痛快かつ爽快なものにさせている。

渡辺（1979）は、脱獄映画の大半は物理的作業に描写を集中し、「ヒーローたちが黙々と準備を重ね、目標にじりじりと肉薄していく、その過程を描くことに費やされる」と述べている。これに対して「ショーシャンクの空に」では、脱獄の作業過程がその遂行後に映し出されるという点において、まるで手品の種明かしを見ているかのようである。

(7) 極端に長い収監期間

終身刑を宣告されたアンディが1947年に投獄されてから1966年に脱獄するまでの期間は19年である。これは他の作品に比べて格段に長い。「暴力脱獄」のルークの刑期はわずか2年であり、「パピヨン」の場合、正確には不明だが、計7年間の独房入りを含めてもその収監期間は10年に満たないと推測される。

この19年という歳月が本映画のスケールを増し、重厚で壮大な物語に仕立てていると考えられる。ちなみに先に紹介した小説「モンテ・クリスト伯」の主人公の入獄から脱獄までの期間は14年である。

(8) 明確な脱獄後のイメージの保有

アンディは脱獄後にやりたいことを明確にイメージしていた。それは「手錠のままの脱獄」のジャクソンが思い浮かべるような幻想的な夢とは異なる。アンディにとって脱獄は究極の目的ではなく、夢を叶えるための通過点であった。ある日彼はレッドに、メキシコの太平洋岸にあるジワタネホという町に住みたいと打ち明ける。そこでホテルを開き、中古のボートを買って修理し、客を乗せて釣りに出たい、と夢を語る。さらにレッドを調達係として誘うが、レッドは莫迦げた話だと取り合わない。しかしアンディの夢は明確であり、その具体的なイメージこそが彼の「希望」であったと考えられる。その希望を叶えるため、脱獄成功後の着替え（スーツ、ネクタイ、靴等）や不正を暴くための帳簿等を携行してトンネルを這い進むのである。

本作品を「夢」を描いた物語であるとする評論は多い。それはアンディがレッドに宛てた手紙の中の“Hope is a good thing, maybe the best of things, and no good thing ever dies.”という一文からも明らかであろう。しかし、アンディが持つこの「希望」というものの特質についてこれまでに十分な吟味や議論がなされてきたとは言い難い。玄田（2010）は、個人レベルの「希望」について、“Hope is a wish for something to come true by action.”という定義を示し、そこに「願い」「何か」「実現」「行動」という4つの要素が内包されていると説いている。しかし筆者がアンディの一文に即して考案する希望の定義（修正版）は“Hope is a wish for something positive to come true by action.”である。勿論“positive”の代わりに“good”でも一向に構わないが、そこに「肯定的な」あるいは「よい」性質を表す5つ目の要素を付加することを提案したい。なぜなら希望とは本能的に悪事ではなく善事を志向するものであり、悪行の根源には絶望があり善行の根源には希望があると考えられるからである。

(9) 脱獄後の囚人仲間との再会

アンディの脱獄後、出所を許されたレッドは仮釈放違反を犯して国境を超える。そして青空の下、太平洋の白浜で2人は再会を果たす。このような脱獄後の囚人同士の再会は他の作品には描かれていない。本作品がひときわ爽やかな印象を与える理由の一つはこの感動のラストシーンにあると思われる。

アンディはこの再会をもイメージしていたと考えられる。彼は服役中にレッドにジワタネホの名を告げ、約束どおり脱獄後に郊外の檜の木の下まで行き、レッ

ドへの手紙とお金を入れた箱を黒曜石の下に隠す。そこから彼は南下し、メキシコに入る前に絵葉書をレッドに出す。その絵葉書には何も書かれていないが、消印にある地名が、アンディがその町で国境を越えたことをレッドに知らせる。これによりレッドはその町を道標としてバスに乗ることができるのである。

(10) 復讐

主人公や仲間に残忍で不当な仕打ちをした刑務所長や刑務官に対する復讐が描かれているのも本作品だけである。アンディはその復讐の方法も事前に練り、脱獄後に新聞社に刑務所内の不正帳簿等を送る。これによって真実が明かされ、彼らはまもなく逮捕されたり自ら命を絶ったりするはめになる。

なお「ミッドナイト・エクスプレス」では、主人公が刑務所長を死なせてしまう場面があるが、これは復讐というよりはむしろ暴発的な「事故」と捉えられる。これに対して「ショーシャンクの空に」の場合、悪人（所長や看守主任）が裁きを受けることになるのは、アンディではなく司法の手によってである。彼がそうなるように仕向けたからなのであるが、まさにこの復讐計画にも彼の如才なさを感じ取ることができる。

ちなみに小説「モンテ・クリスト伯」でも、主人公は自らを陥れた者たちに対して次々と復讐するが、それは脱獄後数年を経てからのことである。

(11) 出所後の社会適応への不安

他の6作品では囚人たちは刑務所の外の世界にひたすら憧れる。極限状態の中で生きる彼らの関心はそこにしかない。しかし「ショーシャンクの空に」では、老受刑者のブルックスとアンディの親友レッドの2人は出所を恐れる。彼らは当初心底願っていた出所の日がいざ近づくとつれ、刑務所内の生活しか知らずにつつしか老いてしまった自分に気づく。そして一般社会で適応できるかどうか大きな不安を抱き始める。

作品中ではその後、この2人が仮出所後に現実の社会で苦悩する様子も映し出される。このような囚人、特に長期刑や終身刑を受けた囚人が否が応でも抱くことになる孤独感や哀愁までも丁寧に描いているところが、この物語全体に奥行きと広がりを与え、ただの脱獄劇ではなく、一つの間人ドラマの高みへと押し上げていると考えられる。

(12) 親友の囚人によるナレーション

本作品では所々でレッドによるナレーションが解説的に挿入されている。これにより視聴者や画面上の役者たちの言動だけでは読み取りにくい物語の背後にあるものや話の展開を理解することができる。19年に及ぶ壮大なストーリーを143分の映画にまとめられた一つの大きな要因は、このレッドの声によるナレーションにあると思われる。レッドがアンディを見守る温かいまなざしがナレーションを通じて伝わってきて、それが本作品を極めて人間味のあるドラマに仕立てていると考えられる。

ナレーターとしてレッドは、刑務所の庭で初めてアンディと話した日のことを「俺は人間的に彼が好きだった」と回想的に語る。そして最後に仮釈放違反を犯してでもアンディに会いに行くことと決心し、定宿から去ろうとする。その場面での語りは、かつてアンディが自分に言った「必死に生きるか必死に死ぬか」という言葉を復唱し、「俺は生きるぞ」と力強く自分に言い聞かせるものである。最後のナレーションでは、過去の回想ではなく、不確かな未来への不安と期待が率直に語られる。それは「国境を越せるといいが。親友と再会できるといいが。太平洋が青く美しいといいが。俺の希望だ。」という言葉で締めくくられる。その直後に2人がジワタネホの白浜で再会し抱き合う場面がズームアウトしてエンディングとなる。

6. 結論

本稿では、既存の代表的な脱獄映画6本と比較しながら、「ショーシャンクの空に」にみられる12の独創性を分析・抽出した。

本作品が公開から四半世紀を経た今日でも、全世界で高い人気を維持している大きな理由は、視聴者の意識・無意識にかかわらず、これら12点の特徴が、他の作品にはない独特のスパイスや隠し味となって奏功しているからであると考えられる。

少し視野を広げて考えれば、一般の人々も社会という「刑務所」の中で、仕事という「労役」や「苦役」を課されているのかもしれない。そして定年退職はまさにお勤め後の「出所」と捉えることもできよう。晴れて出た後に新たな生き甲斐を見つける人もいれば、それまで付けていた肩書が一切外れ、アイデンティティの喪失に苦しむ人もいるかもしれない。しかし定年退職することはできても人生を途中で辞めることはできない。我々は生きている限り、自分の住む社会から抜け出すことはできないからである。その意味では、

「ショーシャンクの空に」をより大きな働き甲斐を求め、目下の仕事をこなしつつ、人知れず努力を重ね、新天地をめざす「転職映画」として鑑賞することもできるであろう。

以上、本稿では「ショーシャンクの空に」に埋め込まれた独創的特徴を掘り出すを試みたが、先に挙げた12点以外にも、筆者の気づいていない事柄が潜んでいるかもしれない。限られた数ではあるが、これらの独創性が優しく行く手を照らすように、本作品は、今は苦しくても明るい未来を自らの手で勝ち取るうとするすべての人たちにとって多くの示唆と励ましを与えるものであると思えてならない。

参考文献

- ピーター・バラカン (2001) 「微笑って死んでいった救世主、ルーク」, ドン・ピアース著 (野川政美訳) 『クール・ハンド・ルーク』, 文遊社.
- Berry, J. (2015) *The Shawshank Redemption*. In S. J. Schneider (Ed.), *1001 Movies You Must See Before You Die* (p. 833). Hauppauge: Barron's Educational Series, Inc.
- Darabont, F. (1996) *The Shawshank Redemption: The Shooting Script*. New York, Newmarket Press.
- アレクサンドル・デュマ (山内義雄訳) (1956) 『モンテ・クリスト伯』, 岩波書店.
- 玄田有史 (2010) 『希望のつくり方』, 岩波書店.
- Gonthier, D. Jr. (2006) *American Prison Film Since 1930: From the Big House to the Shawshank Redemption*. New York: Edwin Mellen Press.
- Internet Movie Database (IMDb). *Top Rated Movies*, Retrieved September 29, 2018, from https://www.imdb.com/chart/top?ref_=nv_mv_250
- 金澤誠 (2017) 「ショーシャンクの空に」, 前野裕一編 『午前十時の映画祭8 プログラム』, キネマ旬報社.
- 姜尚中 (2007) 「姜尚中 映画を語る (第21回)」, 『第三文明』, 第三文明社.
- Kehrwald, K. (2017) *Prison Movies: Cinema Behind Bars*. New York: Columbia University Press.
- スティーヴン・キング (浅倉久志訳) (1988) 「刑務所のリタ・ハイワース」, 『ゴールデンボーイ: 恐怖の四季 春夏編』, 新潮社.
- 國友万裕 (2015) 「同性愛映画としての『ショーシャンクの空に』」, 『映画英語教育研究』, 20, 137-147.
- 黒川裕一 (2005) 『見ずには死ねない! 名映画 300 選 (外国編)』, 中経出版.
- 濱野清志 (1999) 「第12章 生きることの価値をもとめて: 心理臨床と宗教性」, 山中康裕・橋本やよい・高月玲子編 『シネマのなかの臨床心理学』, 有斐閣.
- 町山智浩 (2017) 「#194 暴力脱獄 (復習編)」, 『町山智浩の映画塾!』, <https://www.wowow.co.jp/movie/eigajuku/> (2018年9月29日閲覧)
- 皆川博子 (1978) 「ラストにみる”男”の顔の変貌」, 『キネマ旬報』, 746, 94-95.
- 西内誠 (2009) 「"Get busy living or get busy dying": The Shawshank Redemption (1994)」, *OLIVA*, 16, 97-155.
- Parse, R. P. (2007) Hope in "Rita Hayworth and Shawshank Redemption": A Human Becoming Hermeneutic Study, *Nursing Science Quarterly*, 20(2), 148-154.
- Penning, L. (2005) The Night Watch / The Hole. In J. Müller (Ed.), *Movies of the 50s* (pp. 518-523). Spain: Taschen.
- Reinhartz, A. (2013) *Bible and Cinema: An Introduction*. Abingdon: Routledge.
- 齋藤孝 (2003) 『段取り力: 「うまくいく人」はここがちがう』, 筑摩書房.
- 産労総合研究所 (2009) 「20代、30代のサラリーマン100人の「はたらく姿、生きる姿を描いて印象に残った映画」とは」, 『人事実務』, 46 (1064), 40-43.
- Sobol, J. J. (1996) The Shawshank Redemption: A Review, *Journal of Criminal Justice and Popular Culture*, 4(1), 15-17.
- 高沢瑛一 (1979) 「ドン・シーゲルが描く肉体と行動の力学」, 『キネマ旬報』, 776, 58-60.
- 田山力哉 (1978) 「人間は決して絶望しない事が大切である」, 『キネマ旬報』, 746, 98-100.
- 宇田川幸洋 (1979) 「C・イーストウッドとマルパソの足跡」, 『キネマ旬報』, 776, 61-63.
- 鷲巣義明 (1995) 「スティーヴン・キング映画の系譜」, 『キネマ旬報』, 1162, 26-29.
- 渡部幻 (2014) 「暴力脱獄」, 渡部幻・石澤治信編 『60年代アメリカ映画100』, 芸術新聞社.
- 渡辺祥子 (1995) 「ティム・ロビンスってほんとにいい役者」, 『キネマ旬報』, 1162, 24-25.

渡辺武信 (1979) 「自由への意志の讃歌としての”脱獄映画”」, 『キネマ旬報』, 776, 64-65.

映画作品

『アルカトラズからの脱出』 (Escape from Alcatraz). Dir. Don Siegel. Paramount Pictures, 1979. Paramount Home Entertainment Japan, 2001. DVD.
『穴』 (*Le Trou*). Dir. Jacques Becker. Studiocanal, 1960. IVC, Ltd., 2015. DVD.
『ミッドナイト・エクスプレス』 (Midnight Express). Dir.

Alan Parker. Columbia Pictures Industries Inc., 1978. Happinet Pictures, 2008. DVD.

『パピヨン』 (Papillon). Dir. Franklin J. Schaffner. Cinemotion N.V., 1973. King Records, 2018. DVD.
『ショーシャンクの空に』 (The Shawshank Redemption). Dir. Frank Darabont. Castle Rock Entertainment, 1994. Shochiku Home Video, 2007. DVD.
『手錠のままの脱獄』 (*The Defiant Ones*). Dir. Stanley Kramer. Metro-Goldwyn-Mayer Studios Inc., 1958. 20th Century Fox Home Entertainment Japan, 2002. DVD.

Originality of “The Shawshank Redemption” as a Prison Break Movie

Faculty of Liberal Arts, Department of English as an International Language
Satoru TAKAHASHI

Abstract

Since its release in 1994, the movie titled “The Shawshank Redemption” has gained increasing attention and popularity among viewers around the world. The purpose of this paper is to demystify why this film has been widely accepted and highly rated over the years. To this end, the author selected six additional major prison break movies and looked into their stories and characteristics. Then based on this investigation, he discussed the uniqueness of the film in comparison to those six movies. As a result, twelve original features were extracted, namely, 1) wrongful conviction, 2) high social status, 3) being cultured (knowledge, expertise, and decency), 4) far-reaching and sustainable altruistic behaviors, 5) lack of bodily strength, 6) non-disclosure of hole-digging process, 7) extremely long period of incarceration, 8) clear image of what to do after prison break, 9) reunion between ex-inmates on the outside, 10) revenge against villains, 11) anxiety about social adjustment after prison, and 12) narration voiced by a close inmate. Those features seem to serve as vital ingredients and contribute to enhancing the quality of the work as a colossal human drama, leaving the audience with a deep appreciation of the film.

Keywords: prison break movie, wrongful conviction, being cultured, altruistic behaviors, revenge